

津軽地方の女子教育について考える その3

—— 個人史を通して——特に昭和期 ——

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目 次

- I. はじめに
- II. 「森のイスキア」を主宰する佐藤初女
- III. マスターズ・スキーの山本トヨ
- IV. 戦時中女学校生活を過ごした高木ヒロ
- V. 城東学園を創設した下田敦子
- VI. 外国で活躍する村上（Green）誠子
- VII. おわりに

I. はじめに

何故津軽地方の女子教育にこだわり続けるのか。筆者はこれまで明治初期の津軽地方にどのようにして女子教育が始められたか。^{#1}

学制発布後津軽地方で女子の高等教育がどのように行なわれたかを探究してきた。^{#2} そこで本稿では昭和期の津軽の女子教育の様相について見ていきたい。

現在（1995.8/30～9/8）、中国・北京において第4回国連女性会議の非政府組織（NGO）フォーラムが「平等・開発・平和」をテーマに開催され、189の国々から18,000人の女性が集まっており、フォーラム主催のマンジットさんは「女性の問題は人権や平和・開発などの重要課題と切り離すことはできない。全ての問題は女性の問題である。」^{#3}と強調していた。

今年は戦後50年といわれ、世界的にさまざまな形式の行事が催され、マスコミでは盛んに特集を組んでいる。昭和天皇がご存命であれば、昭和70年であるこの70年間に、日本ばかりでなく、世界が大きく変わったことは周知のとおりである。その中であって、日本の本州のはずれのこの津軽地方にあっても女性の社会進出はめざましい。明治初期に生まれた女子教育は「良妻賢母であること」を目標としてきたが、昭和、平成になって国際人としての女性が求められるようになった。

しかし、今、何故、女子教育が重視されなければならないのか。雇用機会均等法が発布されてすでに10年、新たに、「男性とは」、「女性とは」を考える時期になっ

て来ている。女性を特別視するのではなく、一個の人間として、今何を為すべきか。今後どのような教育がなされなければならないか。これからの世代の人達をどのように育てるべきかが、私たち先達者としての当面の役割ではないだろうか。このことについて元日本女子大学の青木生子学長がいみじくもその著書に「今世紀の初めに、主として在野の教育者によって創始された女子高等教育は、敗戦まで40余年の歳月、関係者の血のにじむ努力が続けられたにもかかわらず、専門学校段階にとどまらざるを得なかった。男尊女卑の時代に抗して、女性を人格を持った個として、「人間として教育すること」を第一義に掲げ、女性の自立と社会的向上を目指して女子の高等教育を行った、例えば日本女子大学校の場合など、現在において、さらに将来にわたって、一貫して変わらぬ教育理念であると信じている。」^{#4}と書いている。

筆者はライフワークとして津軽の女子教育について追求してきたのであるが、本稿では、ボランティアが日常化している現在にあって個性的な奉仕活動をしている佐藤初女、一昨年創立50周年を済ませた弘前女子厚生学院で学びマスターズ・スキーで活躍している山本トヨ、戦時中学生生活を送り、卒業後母校に献身した高木ヒロ、今年創立30周年を迎えた城東学園を創設し県会議員としても活躍している下田敦子、戦後の教育を受けた人の代表として現在アメリカに住んで津軽との掛け橋となって活躍している村上誠子の5人からのアンケート或いはインタビューによる各々の個人史を通して、昭和期にこの津軽地方で受けた教育の実態を把握して見たいと考えた。そのことによって津軽地方の教育制度の変遷をみるができるのではない。又、戦後派の人達が人口の大半を占める一方、創立110周年を迎えた女子教育の学校が現存していることをはっきりと踏まえ、認識しておく必要があると考える。

戦後女性の生き方は大きく変わってきた。戦前は国を守る男子を立派に育てることが女性の使命の第一であった。それでもなお、女性を一個の人格あるものと自覚し社会進出をはかった人々は多くいる。どんなに

女性が社会で活躍しても、「今最も必要としているのは、精神的に豊かな女性である。女の心を持つ女である。」⁴⁵とあり、又「家の中にひっこんで子供を育てるよりは、社会に出て一人の人格として認められ、社会的に働いた方がずっと価値があるように思う女性が多くなった。しかし目先のことだけではなく、もっと長い目で深く人間社会のことを考えれば、家庭の教育が、どんなに重要かがわかるであろう。日本の保育のために一生をささげたドイツのゲルトルト・キュックリッヒ（1897—1976、フレーベルの愛の保育の精神で、日本の幼児教育のために貢献した）は本来の母性愛の重要性を耐えず強調し、結婚しなくても、子供を持たなくても、女性は、母性的能力をすべての、子供に、充分に発揮しなければならないことを、若い人にいつて聴かせていた。」⁴⁶どんなに時代が変わろうとも、どんなに表面に現われる生き方が変わろうとも、女性の使命は変わらないと考える。

II. 「森のイスキア」を主宰する佐藤初女

i 略歴

- 1921（大正10）年 青森市生まれ
青森で小学校卒業
北海道庁立函館高等女学校卒業
青森技芸学院（現青森明の星学園）
家政科第一回生として入学
- 1941（昭和16）年 同校卒業
- 1941（昭和16）年 青森市内の小学校に奉職
- 1944（昭和19）年 退職、結婚
- 1945（昭和20）年 戦災にあって弘前に移住現在に至る
- 1955（昭和30）年 ローケツ染めを学ぶ
- 1960（昭和35）年 染色教室を開き現在に至る
- 1970（昭和45）年 15年間弘前学院短期大学家政科で染色を教える
- 1980（昭和55）年 「弘前イスキア」開設
- 1992（平成4）年 「森のイスキア」開設
現在大清水ホーム後援会会長、
明の星学園同窓会会長、
ガール・スカウト日本連盟監事
- 賞**
- 1993（平成5）年 弘前シルバー卅賞
- 1993（平成5）年 ソロプチミスト ボランティア女性大賞
- 1993（平成5）年 ミキ女性大賞
- 1995（平成7）年 東奥賞

ii. 「森のイスキア」を始めるきっかけ

佐藤が現代の「かけこみ寺」といわれる「イスキア」を始めたきっかけは、心の安らぎ・いこい・心を病む人のために、小さい時には、小さい時なりに女学校の時には女学生なりに、社会人になってからは社会人として何かをしてきたが、やがて人づてに人が多く集まるようになって、自宅2階を増築した。

そこで何と命名したらよいかと考えた時に、一つのエピソードを思い出した。「イスキア」の意味はイタリアの南西にある火山島の名前で、「ナポリの大富豪の息子で地位も財産も能力もある人が、恋人に愛を受け入れられた瞬間に、どうしようもない倦怠感に襲われて、子供の頃父に連れられて行ったイスキア島を思い出し、自分を取り戻そうとまた訪ねた」、ということである。その地中海の島の様なものを佐藤自身も作ろうと願った。そしてできたのが岩木山の麓の、自然の中に建てられた「森のイスキア」なのである。

この施設の経営は貸別荘としての使用料だけで賄い、何の援助も受けず、お互いが助けあうことを目的としている。援助を受けると何かをしなければならなくなるから、あくまでも自由にやりたいと思っているから援助は受けない、という話であった。佐藤は自らの体験を大切にして、「少しでも人の役に立ちたい」という子供の頃からの思いを実現することができた。

誰もが求める心のいこい・安らぎには食事が最も大切であると、いつも自然の山菜でおいしい料理を作り、語り合うことに努めている。人はそれぞれ自分の中に自然の治癒力を備えており、おいしい食事をすることによって、自分を取り戻す。彼女はこの食事に必要な隠し味の塩のような役目をしているのではないだろうか。

彼女自身は目立たず、地域とのかかわりを大切にしようと考えたが、最近彼女の働きは大きく取り上げられ、龍村仁監督が作った映画「地球交響曲第二番」に登場することになり、その映画は全国的に大きな反響を呼んだ。ボランティアが盛んになった今日、この映画では「チベット仏教最高指導者ダライ・ラマ、映画『グランブルー』のモデルにもなった海洋冒険家ジャック・マイヨール、34年間宇宙に向けてコンタクトを取り続けている天文学者フランク・ドレイクと国籍も職業も異なる人達の中であってこの作品の軸になっているのが初女氏だ」⁴⁷と監督は言っている。

佐藤がこのような働きをするきっかけとなったのは「奉仕のない人生は意味がない。奉仕には犠牲が伴う、犠牲の伴わない奉仕は真の奉仕ではない」というカット

リックの神父様の言葉だったということをいつも彼女は話している。が、他人のためにこれほどまでも自己犠牲を試みる彼女には自分自身との闘いはないのだろうかと思うが、岩木山の麓にあるいい家「森のイスキア」で、彼女が「ここは誰でも気軽に来てくれていいですよ。自然の中で自分と向き合えば、本当の自分の気持ちが見えてきます。」と言って迎える笑顔には心の底からの優しさ、母の持つ優しさがあるのだと思う。

癒された人たちの協力によって山荘が建てられ、山の中に鳴り響く鐘が贈られて、ここでも小さな力から大きな輪を生みだしていることが証明されている。

III. マスターズ・スキーの山本トヨ

「全日本スキーマスターズ大会」で65歳代5キロ見事に1位となり新聞を活気つけた昨年の春のことである。その新聞の記事の中に⁸⁸「スキーは生きる道しるべで生涯の目標。足腰が立つうちは挑戦したい。」と還暦が過ぎた今も現役で、マスターズをはじめ世界大会をまたに掛け常に上位の実力。宝物のメダルも人生の年輪同様、毎年その数を増やしている。そしてスキーとの出会いを話しているが、その中に一昨年創立50周年を迎えた弘前女子厚生学院のことに触れていた。

「山本がスキーを始めたのが大鰐小学校の6年の時、級友に触発され弘前高等女学校（現弘前中央高）を志願したが、当時大鰐からは弘高女に入るにはスキーができることが条件だった。そこで母親にねだってスキー店に行ったが、お金が足りずそれでもあきらめずに、お店の人に話して売って貰ったという。これが山本の「スキー人生」を作ったのである。スキーの特訓のかいあって見事弘高女に合格、卒業後は6年間教鞭をとったが、「学校を留守にする」と校長と衝突した。先生とスキーを天秤に掛けていた時、弘前女子厚生学院の創設者で当時の体協会長、鳴海康仲氏からの誘い。まさに天の声だった。多くの出会いの中で本格的な競技生活に入り、第30回の全日本での優勝。五輪候補にもなったが、女子の派遣は見送られた。「悔しくてね。この気性だから」と、悔しさをバネに女子選手が世界にはばたく基礎造りに奔走。今は五輪開催地で滑ることで夢の一端をかなえる。またスキーを通じて高松宮殿下と出会い、「人生を教えられた。」という。ここでは特に山本自身と今の山本に育てた弘前女子厚生学院について触れたい。

i. 略歴

- 1940（昭和15）年 大鰐小学校卒業
- 1940（昭和15）年 青森県立弘前高等女学校入学
- 1944（昭和19）年 同上卒業
- 1944（昭和19）年 大鰐町立大鰐小学校勤務
- 1948（昭和23）年 大鰐町立蔵館小学校勤務
- 1950（昭和25）年 弘前女子厚生専門学校入学
- 1953（昭和28）年 3月 同上卒業
- 1953（昭和28）年 4月～10月 鳴海病院と弘前女子厚生学院勤務
- 1953（昭和28）年 10月 結婚して岡山県金光町に住む
- 1953（昭和28）年 岡山県笠岡商工高等学校・笠岡市立飛島小中学校・岡山県立水島商業高等学校勤務
- 1966（昭和41）年 業高等学校勤務
- 1966（昭和41）年 8月～ 青森県平賀町立平賀中学校・大鰐町立中学校・青森県立黒石商業高等学校に勤務
- 1988（昭和63）年 定年退職し現在に至る

ii. 弘前女子厚生学院のこと

「弘前女子校生学院は1942（昭和17）の4月、日本で最初の養護訓導養成所として開校。同年6月一種保健婦養成所併置して発足し、1942（17）年10月校名を弘前女子厚生学院とする。院長鳴海康仲。そして戦後保健福祉人材養成の学院として1945（昭和20）年9月弘前市山道町の弘前高等家政女学校内より現所在地弘前市大字富田字大野1に移転する。ここは旧陸軍八師団の将校たちの研修と休養の施設であった。

弘前女子厚生学院は時代の養成に应运えて新しく栄養師養成・保母養成と、社会発展の為の人材養成の役割を担っている。

創設者鳴海康仲は「私達の信条」として次のように掲げており、『私達はみんなが健康で幸福な朗らかな国を作るためにお互いに励ましお互いに助けあって余裕のある生活をいたしましょう。全人類の幸福をねごと愛と奉仕の道は人間に与えられ至上の権利であり義務である』⁸⁹これを教育理念として現在も引き継いでいる。ここで「愛と奉仕」がキリスト教だけのものではないことを再認識させられた。

ここで、卒業生の思い出から当時の社会情勢を見ることができたので引用する。

「養護訓導養成所ができた当時の社会的な背景は、乳児死亡率が高い、子供の体力が劣っている、結核死亡率が高い、平均寿命50年、トラホーム患者が多いことなどなど。こういう保健状況であることを憂慮して創設者は「女子の保健指導者を養成する。」という信念で

日本で初めて創立した。」¹⁰ 弘前女子厚生学院は時代の流れとともにその教育内容を変えていき、社会の要求に応じてきている。先のも述べたように、1942（昭和17）年6月に弘前養護訓導所として設置され、1944（昭和19）年2月には看護婦養成所として県知事から指定される。さらに同年3月には国民学校施行規則第一号により文部大臣より養護教諭養成所として指定される。1946（昭和21）年5月財団法人鳴海研究所清明会より分離独立し、財団法人弘前厚生学院設立、弘前女子厚生専門学校設置の件、文部大臣より許可される。1949（昭和24）年弘前女子厚生専門学校は中学校、高等学校家政科・保健科教員無試験検定に合格。1950（昭和25）年4月栄養士養成所として指定を受ける。1951（昭和26）年児童福祉法による保母養成施設申請、厚生大臣より認可され、弘前女子厚生専門学校内に弘前保育専門学校開設。1956（昭和31）年3月弘前女子厚生専門学校最後の卒業生を送り、弘前保育専門学院を弘前女子厚生学院の旧名称に復し、現在に至る。1989（平成元）年2月厚生大臣より弘前女子厚生学院介護福祉士養成科（平成元年4月入学より適用）を介護福祉士養成施設として指定される。」¹¹

弘前女子厚生学院の卒業生は戦後のベビーブームの時には保母を各保育所に派遣して喜ばれ、現在は老人ホームに介護福祉士を送って、社会に大きく貢献している。

iii. 山本トヨを通して見る津軽のスキー界

1944（昭和19）年3月山本は晴れて弘高女41回生として卒業し、4月からすぐに大鰐小の女教師となって教壇に立つ。戦場にあっても物資に乏しく、山本は、校内よりもスキー場へ児童を連れていき、自然の中で、良く学び、良く遊んだ。当時は、冬もスキーを滑る人はあまりおらず、独り淋しいゲレンデにシュプールを描いていた。

やっと、終戦になって、大鰐・弘前スキークラブ員が集まって、夏休みにゲレンデの芝刈りをして、スキーシーズンを待った。いよいよスキー大会の復活。山本はあじらの山に取りつかれたように、四季を通して、トレーニングに出かけ、いつも真っ黒な顔をして乱舞していた。

地元にも、スキー史に名高いインカレ・全日本・国体などの大会が開催され、全国から各種目の選手が続々と集まり光栄にも高松宮宣仁殿下のご臨席を仰ぎ、スキー場は大変賑やかになった。

山本は、国体アルペン選手となって、連続10回以上出場して、表彰された。しかし、優勝できなかったこ

ともあって6年間の教職を退き、弘前女子厚生専門学校に入学して、1950（昭和25）年4月から勉強を始めた。1952（昭和27）年の冬（在学2年生）に、北海道の富良野・黄金山での全日本大会に出場し、回転で念願の金バッジ、滑走で銅、新複合で銀、を獲得した。この年、男子はオリンピックに参加した。しかし、女子は経済的な理由で参加できず、ただオリンピック選手の候補となって、合宿に参加した。そこで女子アルペン選手18名が集まって、《レディー・ズ・スキークラブ》を、大鰐の自宅で設立し、事務局を担当した。

目標は《女子もオリンピックへ参加しましょう》で、このスローガンを掲げ、1971（昭和46）年の札幌オリンピックに後輩を初出場させ、会員一同、歓喜の声援を送った。その間、山本は1953（昭和28）年弘前女子厚生専門学校を卒業し、10月縁あって金光町に嫁いだが、スキー競技は捨てられず、長男誕生後、ママさん選手第一号となり、岡山県に於いても皇后杯の得点を取り、始めて岡山県スキー史上に記録を残すことができた。

1960（昭和35）10月連れ合いの不慮の事故によって、1966（昭和41）年故郷に戻り、翌1967（昭和42）年の大鰐国体に参加し、以後、大鰐の実家を合宿所にして、本県のアルペン選手の育成を目標に、専心努力してきた。その甲斐あって、ノルディック五国とともに、アルペン五国青森県と贅えられる時代を迎えることができた。

— 中略 —

1973（昭和48）年、体力の限界となって倒れ、ひたすら養生に努め、この間次ぎの目標を考え始めた。参加したいと思ったオリンピックが開催されたスキー場に足跡を残したいと1980（昭和55）年の冬からスキー行脚を始めた。1977（昭和52）年の大鰐国体において菊池正八氏によって《ペテランスキー大会》が実現したが、女子の参加はなく、山本はその時前走をつとめた。

3年後に、女子の参加も認めて貰って、山本は次ぎの目標としていたこの大会に参加できた。その大会も、今年は15回となり、名称も《全日本スキーマスターズ大会》となり、優勝7回、準優勝5回、連続12回の出場を果たすことができた。また、《国際スキーマスターズ大会》に、日本からも出場し、《青森県スキーマスターズ協会》を設立することができた。そして、時代の変遷とともに、1991（平成元）年3月に、アメリカのサンバレースキー場での大会に、初めて海外遠征の旅に出発し、幸いにも、在米中の息子が、コーチ役とガイド役をしてくれたので、大回転で3位に入賞し、

銅メダルを胸に下げて貰い、歓喜のあまりシーハイルを叫んだ。」¹²

山本は現在弘前女子厚生学院の同窓会会長を努め、茶道裏千家の教授として後輩の指導に当たっている。

III. 戦時中学生時代を過ごした高木ヒロ

昭和初期に誕生し、戦時中を弘前学院で過ごし、卒業後長らく母校のために尽くした高木ヒロを通して戦時中の学校の様子をかいま見ることにする。

i. 略歴

- 1929 (昭和4) 年 7月11日 生まれ
- 1942 (昭和17) 年 4月 弘前女学校入学
- 1947 (昭和22) 年 3月 弘前聖愛高等女学校 (旧弘前女学校) 卒業
- 1947 (昭和22) 年 4月 青森師範学校本科1年入学
- 9月 家事都合退学
- 1949 (昭和24) 年 2月 青森師範学校本科1年に編入学
- 1951 (昭和26) 年 3月 青森師範学校卒業
- 1951 (昭和26) 年 4月 弘前大学教育学部3年に編入学
- 1953 (昭和28) 年 3月 弘前大学卒業
- 1953 (昭和28) 年 4月 弘前学院聖愛高等学校・中学校理科教諭就職
- 1990 (平成2) 年 3月 弘前学院聖愛高等学校退職
- 1990 (平成2) 年 4月 弘前学院聖愛園園長に就任
- 1995 (平成5) 年 3月 同上退職

ii. 弘前女学校入学の動機

県立弘前高等女学校を不合格。裏庭の鉄棒で大車輪をたのしんでいたお天婆娘が、体育の盛んな学校を不合格したのを一番喜んだ教師をしている兄の勧めで弘前女学校に入学。

iii. 在学中或いは在職中の弘前女学校の様子

ピカピカに磨き上げられた校舎 (姿が写る) で、おしとやかな上級生に感服しながらの女学校生活が始まった。歓迎迎会の立派なこと。衣装も素晴らしい。土蔵に保管されていた。音楽会も学内と公開日の二日かかり、音楽学校の異名をもっていた。毎朝の礼拝には、ピアノを聞きたいためにほんとうに静かに入場したものだ。クリスマスの賛美礼拝もコーラス隊によるハレルヤ或いはグローリア等、クラス単位・学年単位の合唱等非常に洗練された歌で賛美した。礼拝は、憲

兵の監視の下であろうと一日も絶やすことなく続けられた。

校長は、お嬢様では困ると、体力づくりに懸命だった。年間を通して、毎月一回は往復6里位 (百沢迄) 遠足を実施。出征兵士の家族への勤労奉仕。降雨のため引き揚げた場合は直ちに授業。戦時色が濃厚になっても、勉強はとてつもない生活を書き通した教育だった。英語の授業も許容範囲の3時間は実施 (殆どの学校は英語廃止)。昭和19年からは、業間訓練と称して2時間目と3時間目の間に一斉に床磨き、放課後には校庭で運動をこれからの行事は生徒の号令の下に実施。おしとやかにしていても、お転婆娘は見抜かれて、いつも号令係りの運動部員だった。市の中心街にある木造校舎は、爆弾の標的になるという理由で解体命令が下され、存続のために工場誘致を出願したり、嘆願書の提出をするという存続の岐路にたたされた大変な3ヶ月だった。終戦を迎えて今日の隆盛を見るに至った。大湊でも女学校存続を毎夕熱心に祈り続けた。

一学年上の生徒は挺身隊として、四年で終戦を迎えた私達の学年は、五年制度が復旧して三分の一は五年に進級。創立60周年の華やかな年を宗教的にも文化的にも最大級の講演者或いは芸術家を迎えての体験は喜びと感謝で一杯だった。時に流行した生徒会活動も一早く復活し、弘前中学校 (現弘前高等学校) に次いで、活発に活動していた。もっとも、昭和の初めに誕生した校友会の組織の一部 (文芸部・運動部・図書部・購買部・保健部・音学部) 戦時中も活躍していたので、違和感もなく、伊藤くに先生のご指導の下に活発な活動を展開した。特に創立60周年の多彩な行事には折りよい存在だったと思う。服装は下級生の場合、物資不足の為不揃いだった。履物も特に制限もなく下駄ばきでもよかった時代だった。入学した頃の上級生は、室内ばきも革靴だったし、夏は白、冬は紺の帽子だった。そして、バッジも純銀製の七宝焼。

在職中の学校は戦前同様五日制で土曜日が休みで日曜学校を実施。宗教教育が盛んだった。YWCA主催の希望者による修養会の他にクラス毎の生活教室が為されて今日に至っている。また戦後直ちに宣教師として帰って来られたバイラー先生をはじめ、5、6人の宣教師による英語教育も厳しく、全ての面で活気にあふれていたし、対外的にも、どの部門でも大いに活躍し、認められ優位にたって、生徒も自信を持って行動した。時の校長小田信士は、女子教育は女性の教師で、と。男子教員はごく少数だった。男子教員が増え始めたのは、昭和40年代から。40年代の後半から大幅な選択制の教育過程に切り換えられ、個々の多様な進路に適合

した選択ができるようになった。近年それが一斉指導しやすい過程にある程度改められて実施されている。

iv. 卒業後の進路について

小学校時代から教員志望だったので、迷わずに教員養成過程の師範学校に進学。戦後の食糧難と、経済的にも健康上の問題からも上京して進学は無理。師範学校から弘前大学教育学部へ編入学をして母校の理科教師として37年。定年後直ちに幼稚園の園長として5年間。計42年勤続した。現在は日本基督教団弘前教会の長老として奉仕している。

空襲に遭わなかった弘前でも戦時中にはさまざまな制約があり、その中でも学ぶ意欲さえあれば道が開けることを知ることができたのではないだろうか。

IV. 城東学園を創設した下田敦子

i. 略歴

1940（昭和15）年生れ。弘前大学教育学部附属中学校、青森県立弘前中央高等学校を経て秋田短期大学家政科を卒業。東京江上料理学院勤務。

1965（昭和40）年 弘前調理師専門学校開設

1979（昭和54）年 ニューヨーク州コーネル大学ホテル・レストラン学科短期講座を修了。

1988（昭和63）年 弘前介護福祉専門学校開設

1993（平成5）年 弘前ホスピタリティアカデミー開設、校長。青森県県議会議員^{#13}

ii. 城東学園の歩み

1965（昭和40）年4月津軽地方初の青森県認可校として弘前市新寺町に「弘前料理学院」を開設

1971（昭和46）年4月厚生大臣指定

「弘前調理師学校」併設し、資質の高い調理師養成に取り組む

1976（昭和51）年4月専修学校法設定で「弘前料理学院」を「弘前調理専修学校」に、「弘前調理師学校」を「弘前調理師専門学校」に校名変更。各種学校から専修学校としてスタート。

1977（昭和52）年10月校舎を弘前城東中央4丁目に新築移転。

1979（昭和54）年4月学校法人化し、「城東学園」とな

る。

1988（昭和63）年4月東北初の介護福祉士養成の「弘前介護福祉専門学校」開設。

1993（平成5）年4月「弘前調理師専門学校」と「弘前介護福祉専門学校」を統合し、リハビリ医学専門家養成の作業療法を新設して「弘前ホスピタリティアカデミー」として発足。調理科2年制を開設。

1994（平成6）年4月調理科1年制廃止^{#14}

iii. 動機

母が、「女性是一生働く職業を持つべき」という考えを持ち、また親戚の女性達も何人も教員などをしていたので、「何の抵抗もなく」「仕事はしよう」という考えを持っていた。

iv. 下田敦子の教育理念

専門学校として技術の習得や学問が大事なのはいうまでもないが、その前に人づくりが大切です。その中でも、最も大事なことは心づくりではないか。教養と豊かな人間性を兼ね備えた人材を育成する教育方針で臨んでいる。毎週月曜日の全校朝会では心づくりをどうやって実践したらいいのか、教職員にも生徒にも考えてもらっている。どのような「心」を学ぶかという、ごく、ありふれた人の痛みや苦しみが察しられる感性を養えればと毎週実例を通して話している。とにかく、今の若い人は給料を気にして就職する傾向があるが、「人はパンのみにて生きるにあらず」です。仕事をしてあげるのではなく、責任ある仕事をさせていたでいる心構えを忘れないでほしいといつも願っている。^{#15}

下田が学んだ時期はちょうど終戦後であり、青森師範学校が戦災にあって、弘前に移転し、朝陽国民学校が青森師範学校附属小学校となり、さらに青森師範学校が弘前大学教育学部となって、小学校は朝陽小学校と弘前大学教育学部附属弘前小学校となり、中学校もそれにしたがって、弘前大学教育学部附属弘前中学校となった。変化の激しい時期であった。下田はよく理解者に恵まれ、今なお、社会のニーズに応えるために日々邁進している。

v. 下田の願い

4年制大学を卒業すると「学士」の称号を貰えるように、専修学校法ができて20年、ようやく専門学校卒業生に国家資格のほかに国が認定した「専門士」の称

号が与えられることになり、高等教育における職業教育や技術教育に一定の評価をすべきだという考え方が社会に浸透しつつある。介護福祉科は2年制、作業療法科は3年制、調理科2年制は城東学園が初めてであり、それだけ高い専門知識を身につけていけると思う。3学科とも社会的に不足している資格者であり、人材養成に力を入れている。マンパワー不足が叫ばれている中で、一人たりとも宝の持ちぐされをすることなく、社会に貢献していけるように願っている。特に作業療法士・介護福祉士はゴールドプランの策定により益々需要が高まってきている。調理師は資格ができて30数年たち、確実に職業としてのスタンスができたが、欧米並みの評価や理解がえられるようになってほしいと思う。

一方、「福祉社会の充実のために地域ボランティアの重要性が叫ばれている。専門知識や技術を職場だけでなく地域の中に生かし、地域ぐるみで福祉社会を築いてほしい」という記者に答えて、下田は「確かに地域全体で福祉を考えることは大事なことです。これからの社会構造は人口が逆三角型ですので、将来にわたってこの社会を支えていく若い人は大変な苦勞があります。障害者とか、介護を必要としている人の世話に直接、携わることもそうですが、社会全体から見れば一生懸命働いて年金や医療費を負担する人が、弱い立場の人のためになれるようなことを念願において、地域社会で何を為すべきかを考えて活動して貰いたいと思います。」¹⁶

下田は今回の NGO に個人の立場で参加し帰国後直ちに報告会を開いて地元の婦人達を奮起させている。

V. 津軽との掛け橋村上 Green 誠子

i. 略歴

1948 (昭和23) 年生れ。

1968 (昭和43) 年～1970 (昭和45) 年

弘前学院短期大学英文科

1971 (昭和46) 年～1973 (昭和48) 年

東北学院大学英文科・米文科

1978 (昭和53) 年1月～同年12月

Georgian Court College, Lakewood, New Jersey (Post B. A. Study) Department of English

1978年6月～1978年8月

1979年1月～1979年9月

1981年1月～1981年5月

University of Minnesota, Min-

neapolis, Minnesota Post B. A. and M. A. Study at Department of English, Department of East Asian Study

1986年～1988年4月 Washington D. C. USDA (United States Department of Agriculture) 米農務省

Graduate School

Study of English Composition
Study of Principles of Editing

1992年～1993年9月 Study of International Affairs, Asian Fisher's and Fishery Trade

U. S. Department of Commerce
米商務省

Work Experience (Washington, D. C.)

1985年2月～1986年8月 東京放送、朝日新聞、ワシントン支局、支局長アシスタント

1993年～1995年現在 Washington, D. C.
Historical Researcher for Media

ii. どうしてアメリカへきたのか。

卒論で取り上げた米文学のテーマをもう少し研究して見たかったため。全くの個人留学で、両親から「2年間」という期限と、サポートをしてくれるとの了解を受け決定。

iii. どのようにしてシャックロック先生 (東奥義塾宣教師 在任期間1922-1940) が撮られたフィルムをみつけたか。

1991年、村上はかつての古巣でもある、ある報道機関が企画する「真珠湾50周年」特別番組のリサーチャーとして一年間米国立公文書館で資料に目を通す日々を送っていた。米国の「日本学」は戦前「日本語の理解力」というハンディキャップを負いつつも、目覚ましい進歩と発展があったようだ。頭のテッペンから足の爪先まで、とでもいうのか、ありとあらゆる方法で調べ尽くしていた。1920年代から1930年代の間の話。

「弘前」も勿論フィルムの中にあった。当時は村上が調べていたテーマと弘前のフィルムやドキュメント資料は全く拘わりがなかったので、メモだけ記しておいた。あの忙しかった企画もようやく無事終了。1922年の早春から役所で (米商務省) 約18ヶ月程漁業貿易を

中心とした国際関係論を学ぶ研修に入った時あのメモが心にあって役所の昼休みを利用して何度か公文書館に足を運び、はっきり「弘前」ということを確認して報道用のフィルムにしてもらったのが、あのフィルムである。フィルムの検索は意外と時間がかかるが、たった一時間の昼休みがあつという間にすぎ、ついつい2時間近くになったりした。役所の上司や同僚がとても理解があったことと研修期間という軽い立場だったので可能であったと思う。

iv. 日米のかけ橋ということに関して

特に意識して考えたことないが、「弘前の思い出」という文章を書いたら、こちら（アメリカ）の新聞に載った。（ローカル紙）1980年代もそろそろ終の頃、それを当時の弘前市長・福士文知氏へ送ったところ、非常に好意のある励ましを受けた。その後ワシントン D. C. にこられた福士市長、金沢公報室長（当時）、斉藤秘書課長の三人に初めてお会いし、福士市長から戦前米国とかかわった郷土の人達のお話を伺った。非常に心に残るお話だった。趣旨はアカデミックな視点から弘前とアメリカの影響を考えており、それは今もって村上の気持ちをくすぐらせている。ただこうしたことは忍耐と努力が要ることで、最近流行の「交流云々」とは全く趣旨が違うことだけは確かである。むしろ安易な「交流云々」とそれにともなった「英会話産業」は古い時代に先人達が開拓した「アメリカ」に対して「日本」の理解への支障になっている観がする。村上が市長から教わってスタートした郷土の人たちとアメリカのかかわりのリサーチは、まだ初歩の段階だが、是非がんばってかっての人達が歩み築き挙げたものを知りたいと願っている。

村上が、外国に目を開かれたのは聖愛高校の時の世界史の先生との出会いにあったという。

そしてその世界史の時間のことがいつも彼女に勇気を与え、現在はアメリカに住み、Historical Researcherとしての本務を持ちながら津軽からの訪米者があると通訳の手伝いをして活躍している。

アメリカといえば、津軽の生んだ外交官珍田捨巳・いは夫妻のことを忘れてはならない。いは夫人はあのワシントンのポトマック湖畔に桜を植えたその人だからである。¹⁷

1993（平成元）年、村上が送ってくれたシャクロック先生のフィルムの中にはポトマックの桜と昭和初期の弘前公園の桜や弘前の風俗や風景が描き出されている。

VII. おわりに

今回は激動の昭和期を取り上げたが、5人の人を通して共通していることは何であろうか。「はじめ」の項で述べたように5人は妻として、母として家庭人としての役割を果たしながら、社会と大きくかかわっていること、そして5人は小さい時からの夢に向かって日々努力を怠らなかったことであると考え。ともすれば女性は、周囲・環境に左右され、自分の夢を果たすことは非常に困難である。5人の人達が恵まれている人達だと言ってしまうと、それまでのことであるが、佐藤が幼い頃に心をゆさぶられた教会の鐘のように、今「森のイスキア」の屋根の鐘が響き渡り、人々に優しさと人のために働くことの尊さを訴えている。5人が5人とも自分のためにだけではなく他の人の為に働いていることの現実、津軽地方には大なり小なりの女性の団体があるが、今後の課題として、津軽地方にはどのような女性の集まりがあるのか。その集まりはお互いに交流しあっているのか。NGOで話し合われたことが、世界の中の、日本の中の、津軽の中であって、どのように展開されていくのかを見ていきたいと考える。NGOは回を重ねる毎に参加人数は増え、女性が家に閉じ籠ることなく、沈黙を守る時代ではなくなっていることを知らされた。

5人の相違点を考えて見ると、佐藤はカトリックの明の星学園を卒業、山本と下田は県立弘前中央高等学校を卒業、高木と村上はプロテスタントの弘前学院を卒業している。ただそれだけのことと考えてしまってもよいものだろうか。先に述べたようにやはり5人に共通することは形は違っている、他の人のために自分の人生を生かしているということになるのではないだろうか。

村上は全くの戦後派であるが、他の4人は戦時中のさまざまな困難を体験してきている。

その貴重な体験が現在の一人一人を育てたといえるのかもしれない。一人ではできないことも周りの人達と協力することによってどんなにか素晴らしいことができるかを証明してくれている。今回のNGOも日本の「草の根」運動の人々が参加し大活躍したということが報道されていた。小さな女性の活躍が手を繋ぐことによって、どんなに困難なことも克服できるようになり、お互いが情報を交換することによって世界も広がるのである。

しかし、これからは女性、男性が別個のものとしてではなく共に生きるものとして、如何にしたら「共生」が可能になるかを考えていかなければならないのでは

ないだろうか。

(1995. 9. 28)

注 (引用文献・参考文献)

- ^{※1} 掘稿「津軽地方の女子教育を考えるその1」 弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要24号 1988.3
- ^{※2} 掘稿「津軽地方の女子教育を考えるその2」 弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要30号 1994.3
- ^{※3} 陸奥新報1995.8.31
- ^{※4} 青木生子著『明日の女子教育を考える』講談社 1990.6 p.24
- ^{※5} 高見沢潤子著『愛の重さ』玉川大学出版部 1984.2 p.24
- ^{※6} 高見沢潤子著『愛の重さ』玉川大学出版部 1984.2 p.23
- ^{※7} 「怒涛のボランティア—佐藤初女さん—」 NTT 発行『フィランスロピーワールド』1995.7創刊号
- ^{※8} 陸奥新報1994.9.28
- ^{※9} 『弘前女子厚生学院一創立50周年記念誌』 弘前女子厚生学院同窓会1993.9 p.10

- ^{※10} 『弘前女子厚生学院一創立50周年記念誌』 弘前女子厚生学院同窓会1993.9 p.14
- ^{※11} 『弘前女子厚生学院一創立50周年記念誌』 年表より
- ^{※12} 山本トヨ著「私のスキー歴50周年」—青森県スキーマスターズ協会
- ^{※13} 下田敦子著『女ゴ県会議員けっばる』津軽書房1994.8.30
- ^{※14} 陸奥新報『城東学園創立30周年記念座談会』1995.8.8
- ^{※15} 陸奥新報『城東学園創立30周年記念座談会』1995.8.8
- ^{※16} 陸奥新報『城東学園創立30周年記念座談会』1995.8.8
- ^{※17} 外崎克久著『ボトマックの桜』サイマル出版会 1994.11

謝辞：お忙しい中をアンケートに協力下さった先生方、またこのレポートをまとめるためにいろいろご指導下さった先生に紙面を借りて感謝申し上げます。